

「運命の彼」

「ねえねえ、カナ、知ってる？」

私が教室に入るなり、クラスメイトで親友のレイがドタバタと駆け寄って来た。朝が弱い私は、まだ半分寝ぼけまなこだ。

「おはよ、レイ。朝から一体、何の話？」

「大ニュースだよ。リコちゃんが三組のヨシザワ君と付き合ってるんだって！」

「えっ、ほんとに？」

一瞬で眠気がさめた。肩に掛けたスクールバックを降ろすのも忘れて、私は教室後方のリコちゃんの席を見た。リコちゃんは、数人の女子たちから質問攻めに合って、ほんのり顔を赤らめていた。まるで、芸能レポーターに囲まれたアイドル歌手みたいだった。

「リコちゃんね、昨日、ヨシザワ君から告白されて、オツケーしたんだってさ」

レイが耳元で教えてくれる。リコちゃんはとっっても幸せそうに見えた。

「いいなあ、私も恋がしたい！」

私は駄々をこねる子どもみたいに言った。

「ほんとそれな。みっちちゃんもケンヤ君と付き合ってるし、ヒナとニシダもくつつくのは時間の問題だろうし。うらやましいなあ」

レイも深く溜息をついてみせた。

中学校に入って約八カ月。二学期も終わりが見えて来た最近になって、誰と誰が付き合い合っているという話をあちこちで耳にするようになった。はじめの頃は、そういう話を聞くとたびにきやあきやあ言ってはしやいで、カップルになった子たちを祝福したり、からかったりしていたけれど、近頃はちよつと胸焼け気味だ。

私には、今のところ、気になる男子はいない。だから、誰と誰が付き合い合おうが嫉妬めいたものを感じない。それでも、たびたび恋バナやのろけ話なんかを聞かされたら、うらやましさはどんどんふくらんでいく。まるで、恋をしていないのが悪いことのように思えて、

変なあせりで体がムズムズしてしまふ。恋人たちのキラキラした笑顔がまぶしくて、見つめていたら、目がキューっつてなつて来る。

私だって、恋つてやつをしてみたい！

付き合うまではいかなくたっていい。誰かを好きになつて、ドキドキしながらおしゃべりしたり、照れながら一緒に登下校したり、そんなことくらいしてみたい。

「あーあ、私にもどこかに運命の彼、いないかなあ」

冗談めかしてレイにそう言つたら、となりの席のリユウヤが突然こちらを振り向いた。

「俺が占つてやろうか？」

「ちよつと、リユウヤ。人の話を勝手に盗み聞きしないでよ！」

私は恥ずかしくなつて、少し強めの口調で文句を言った。

「いやいや、そんなでっかい声でしゃべつたら、いやでも聞こえてくるって」

リユウヤは平然と減らず口を叩き返して来

る。でも、こういうノリで軽口を叩き合える
リュウヤのことが、私は決して嫌いじゃなか
った。

「リュウヤ、さつき何て言った？」

「俺が占ってやろうか」

「あんた、占いなんて出来るの？」

「うん。俺、得意なんだぜ」

そう言つてリュウヤは、机の引き出しから
トランプを取り出した。

リュウヤはサッカー部に入っていて、勉強
より体育が得意というタイプの男子だ。占い
が得意だったなんて、今までちつとも知らな
かった。

「へえ。じゃあ、ためしにお願いしてみよう
かな。占つてみてよ」

興味を抱いた私は、椅子の背もたれを前に
して、リュウヤに向かつて座り直した。

リュウヤはトランプを器用にシャッフルし
始めた。なるほど、自信満々に言うだけあつ
て、手付きはそれなりに様になっている。

「何だか、インチキマジシャンみたい」

「うるせえな。黙って見てろ」

リュウヤはランプを机の上に何枚か並べた。それを端から順にめくっていく。

「ふうむ、ここはスペードの3か。そしてここは、おおっ、何と、ハートのクイーンか」

リュウヤは本物の占い師みたいに、何やらぶつぶつとつぶやいている。リュウヤはお調子者だ。授業中、お笑い芸人のモノマネをして、先生にうるさいと怒られているようなやつだ。この占いが本気なのか、それとも単なる「占い師のマネ」というネタなのか、私にはいまいち、はかりかねた。

「むむ、出ましたぞえ！」

リュウヤがわざとらしく奇声を発したから、私はつい吹き出してしまった。こいつ、やっぱりふざけているだけだ。

「それでもうわかるの？」

「そうじゃ。わしには未来が完璧に見えてしまふのじゃ」

リュウヤはよくわからないキャラになりきって、威張った口調で私に言った。

「じゃあ、教えてよ。占いの結果」

私は挑発するように言った。どうせこんなリュウヤのおふざけだろうと思った。なのに、ちよつとだけ緊張していた。

「カナ。近い将来、お前は黄色いものと紫色のものを立て続けに目撃するじやろう。そうしたら、その日の放課後、白い公園に行け。そこで真っ赤な服を着ている男子が、お前の運命の人じゃ」

アニメに出て来る魔法使いのおじいさんのような声色で、リュウヤは言った。想像していたよりも具体的なことを言われたので、私は少しドキつとした。もしかして、リュウヤって本当に占いの力があるのか？

「黄色と紫って、何よ？」

「さあ、そこまでは、ちよつと」

「白い公園ってどこ？」

「そこまでは、わしにも見えんのじゃ」

リュウヤは静かに首を横に振る。

「ちよつと、カナ。こんなデタラメの占いを信じるつもり？」

横で私たちのやり取りを見ていたレイが、あきれたように笑い出した。

「まさか。そんなわけないでしょ」

私はそう言って、大げさに肩をすくめてみせたけれど、本当は半分くらい信じていた。

数日後。その日は朝から雪が降っていた。今年最初の雪。この町ではめずらしい雪。私はちよつぱりウキウキしながら、ダツフルコートを着て学校に向かった。

教室に着くと、案の定、男子たちが大声ではしゃいでいた。まったく、あいつらは中一にもなつて、どうして雪くらいでこんなに興奮しているのだらう。犬じゃあるまいし。

あきれながら席に着くと、ふと、窓際の棚の上に花瓶があるのに気付いた。

あの花瓶、昨日はなかった。生活委員の子

が持ち込んだのだろうか。花瓶には、黄色と紫色のパンジーが挿されていた。窓の外にちらつく真っ白な雪と、よく似合っていた。

えっ……黄色と紫？

次の瞬間、私の脳裏にドーンと稲妻が走った。数日前のリユウヤの占いを思い出す。

『カナ。近い将来、お前は黄色いものと紫色のものを立て続けに目撃するじやろう』

そうだ。あの時、リユウヤはそう言った。

黄色と紫のパンジー。これって、あの占いのとおりじゃないか！

私は隣の席のリユウヤを見た。こんな雪の日なら率先して騒いでいるようなリユウヤが、今日はおとなしく本を読んでいた。

「リユウヤ、私、見たよ。黄色と紫！」

リユウヤに掴みかかりそうな勢いで言う。

リユウヤも真剣な顔で私を見つめ返した。

「あの占い、本当なんでしょうね？」

「当たるも八卦、当たたらぬも八卦」

「何それ、どういう意味？」

「信じれば道は開かれるってことじゃ」

リュウヤは相変わらぬ芝居がかった口調で言いながら、片目をピクピクさせた。それが下手クソなウインクだと気付くまで、私には少し時間が必要だった。

何となくそわそわしながら、その日を過ごした。授業もあまり耳に入らない。

白い公園って、どこだろう？

さっきから私はそればかり考えていた。

白って、雪のことか？ 雪が積もっている公園はどこだろう。いや、これだけ雪が降っていけば、どこの公園にだって雪は積もる。

どこの公園が、占いの公園なんだろう？

もしかして、私はリュウヤの適当な占いに踊らされてしまっているだけなのだろうか。リュウヤは今頃、心の中で私を笑っているのだろうか。

いやいや、あの時のリュウヤはふざけているようには見えなかった。もし、占いが当たっていたら、私はこの後、運命の彼に会える

のだ。ここはやっぱり信じてみたい。

「カナ、今日はずっと上の空だね。何か悩みごとがあるなら聞くよ？」

唐突にレイに声を掛けられた。

「ああ、大丈夫。考えごととしてただけ」

私は曖昧に笑って手を横に振った。言えない。リュウヤの占いのことで頭がいっぱいだなんて、恥ずかしくて言えるわけがない。

「さつきからボーっと窓越しに空ばかり見てるから、白鳥でも飛んで来たのかと思っちゃった」

レイの言葉に私はピクリと反応した？

「白鳥？」

「うん。今の時期、ますみ公園にいるでしょ。白鳥。たまにこっちまで飛んで来るから」

「それだ！」

私は椅子から立ち上がりそうになった。ますみ公園の側には柵箕ヶ池がある。そこには今の季節、たくさん白鳥がいる。白い公園はますみ公園だ、間違いない。

「あー、早く放課後になれーっ！」

私は目の前にレイがいるのも忘れて、声に出してそう言った。

待ちに待った放課後。

私はレイのおしゃべりに付き合わされる前に、こっそりと教室を出た。頭の中ではリュウヤの占いのセリフが繰り返されている。

『放課後、白い公園に行け。そこで真っ赤な服を着ている男子が、お前の運命の人じゃ』
リュウヤの占いなんて、きつとデタラメに決まっている。お調子者のあいつのくだらない冗談だ。わかってる、そんなことわかってるさ。今朝、黄色と紫のパンジーを見たのだから。今朝、黄色と紫のパンジーを見たのだから。って単なる偶然だ。そもそも、運命の彼なんて、簡単に見つかるわけがないし。

でも、まあ一応ね。一応、確認だけはね。
私は、あの占いがデタラメだったとしても傷付かないように、自分で予防線を張りながら、足早に帰宅した。

制服を脱ぎ、急いで私服に着替える。雪はもうやんでいた。私は自転車に乗ってますみ公園に向かった。公園が近づくにつれて、もしかしたら本当に運命の彼がいるかも知れない……と思うようになって来た。気が付いたら、呼吸がちよつと浅くなっていた。

着いた。ますみ公園。榊ヶ池。

数羽の白鳥たちが、まったりと池にたたずんでいる。白い公園はここで間違いない。

そんなに長い時間、自転車を漕いだわけでもないのに、私は百メートル走の後みたいに心臓がバクバクしていた。

いるわけない。真っ赤な服を来た男の子なんて、そんなに都合良くいるわけない。だから、ガツカリなんてしないよ。そんな人がいなくても、ガツカリしない。

自分に言い聞かせ、深呼吸をしながら、私は辺りをゆっくりと見回した。

そして、思わず息を飲み込んだ。

いたのだ。

私の後方に、真っ赤なセーターを着た男の人が、立っていたのだ。

この人が……私の運命の人なの？

男の人はゆっくりとこちらに向かって歩いて来た。帽子を目深にかぶっているから顔はよく見えない。

私の足がかすかに震えている。それでも、私は勇気を出して、その男の人に近寄った。次の瞬間、男の人が帽子をパツと取った。私は反射的に目をつぶった。

「よう、カナ」

聞き慣れた声が聞こえて、私は驚いて目を開けた。

そこにいたのは、リュウヤだった。

真っ赤なセーターを着たリュウヤだった。

「リュウヤ？ 何で、ここにいるの？」

私の頭の中に無数のクエスチョンマークが飛び交っている。

「何でって、ここで待ってたんだよ」

リュウヤがポリポリと頭をかく。

そうか。わかった。すべてわかった。

「リュウヤ、私をからかったんでしょ！」

大きな声を出してしまった。私はリュウヤにからかわれたのだ。リュウヤは、インチキ占いを真に受けて柵箕ヶ池までノコノコやつて来た私をあざ笑うため、わざわざここで待っていたのだ。

「悪ふざけはやめてよ。一瞬でも本気で信じた私が馬鹿みたいじゃない！」

何だか泣きたくなって来た。運命の彼に会えるかも、なんて思ってた。浮かれていた数分前の自分を全力で殴り飛ばしたい。

「これ、ドッキリテレビのマネ？ 私を馬鹿にするのもいい加減にしてよ！」

私はリュウヤに背を向けて、この場から立ち去ろうとした。

「カナ、違うんだよ、ちよっと待ってよ！」
リュウヤに腕を掴まれた。

「カナ、聞いてくれよ。俺はお前をからかったんじゃないんだって！」

「じゃあ、何であんたがここにいるのよ？」

「俺、立候補したんだよ」

「はあ？」

「だから……カナの運命の彼に」

私は驚いて目を丸くした。リュウヤが何を言ってるのか、よくわからなかった。

「俺、カナのこと好きなんだよ」

「は？ え、ちよつと、何、何？」

突然のことに思考が追い付かない。私は完全にパニックだった。

「これは、俺の占い大作戦だったんだ」

「う、占い大作戦？」

何だ、そのダサイ作戦名は？　ますます、わけがわからない。

「あの占いは本当だって信じさせて、ここで赤い服を着て待ってたら、カナが俺のことを運命の彼だって勘違いして、好きになってくれるんじゃないかっていう……作戦」

最後の方はほとんど聞き取れないくらいの小声だった。でも、そこまで言われて、私に

もようやくカラクリがわかった。

「教室の花瓶……黄色と紫のパンジー。あれはリュウヤが置いたの？」

「そう。俺が家から持って来た」

「その赤いセーターは？」

「鞆の中に入れてて、さっきトイレで着替え
たんだよ」

私は、リュウヤが花瓶を抱えて誰よりも早く登校するところや、トイレで赤いセーターに大急ぎで着替えているところを想像して、思わず吹き出してしまった。

「ばーか。何やってんのよあんだ」

「わ、笑うなよ。俺、真剣なんだぞ」

リュウヤがすねたように言う。真面目な顔で私をにらみつけるリュウヤを、不覚にも、ちよつとだけ可愛いと思ってしまった。

「要するに、リュウヤは私のことが好きってことね」

「う、うん。そうだよ」

「私に遠回りな告白をしたってことね」

「まあ、そういうこと」

リュウヤは私の方を見ずに、もじもじと足踏みしている。

運命の彼、か。

もつとかつこいいやつなら良かったな。もつとオシヤレで、クールで、大人っぽくて、おしやべりしてたらドキドキしちゃうようなやつ。ああ、これが恋なのねって、キュンキュンしちゃうようなやつ。

今、私はドキドキもキュンキュンもちつともしていない。

でも、心がポカポカと温かい。すごく穏やかで、すごく嬉しい気分に包まれている。

運命の彼、か。

ま、想像と現実の違いってことだよな。

「な、何だよ。何で黙ってるんだよ？」

リュウヤが私の顔を覗き込む。

「いいよ」

無意識のうちに言葉が出ていた。

「え？」

「だから、リュウヤが運命の彼でも、別にいいよって言ってるの」

何だか急に恥ずかしくなってきた。リュウヤから目をそらしながら言った。

「ほ、本当に？」

「うん」

「俺と、付き合ってくれるの？」

「うん」

「え、本当に？ からかってないよな？」

「しつこいな。信じられないならいいよ」

私は背を向けて歩き出した。

「あ、ごめん、信じるってば」

リュウヤがあわてて追ってきた。私は振り返って、思いつきり笑ってやった。

雪はすっかりやんで、冬の低い太陽が辺りをやわらかく照らしている。リュウヤの真っ赤なセーターは、池のたくさんの白鳥たちを背景にして、恥ずかしいほどあざやかに目立っていた。たぶん、池の水面に今の私の顔を映したら、それと負けないくらい真っ赤なん

だろうなと思った。

あーあ、これ絶対、みんなにからかわれるやつだ。こんなヘンテコな占いがきっかけで付き合うことになったなんて、みんなに大笑いされるだろうな。

でも、ま、いいか。

リュウヤが私に追い付いた。私は黙ったまま、リュウヤに右手を突き出した。

「指が冷えて寒い。こんなところに呼び出したあんたのせいだからね」

リュウヤは少し照れながら、私の右手をギュツと握った。

何羽かの白鳥がバサバサと飛び立ち、クーと鳴き声を上げた。私たちのことをはやし立てているように聞こえて、私は思わず、苦笑いを浮かべた。

【了】